
気が付いたら、攻略されそうです・・・

零塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら、攻略されそうです・・・

【Nコード】

N8720Y

【作者名】

零堵

【あらすじ】

目が覚めると、俺は女の子になっていた
しかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたら
ゲームのキャラになっていて、しかも主人公とのトゥルーエンド百パーセント状態で、このままいくと一週間後にトゥルーエンドになるので、俺はこう決める
「この状況で、バットエンドを目指してやるぜ」と
そんな、性転換した彼女の物語

プロローグ

気がついて、目が覚めると、そこは自分の住んでいた部屋とは全く違った場所だった。

「え……って、声が!？」

目を開けて、部屋の中をしてみる。

俺のいた部屋とは随分違い、部屋にぬいぐるみが飾っていたり、鏡面台と勉強机があったり、まるで女の子の住む部屋だと思った。それにさっき出した声も高かったし、もしかして……と思い、胸とか触ってみる

自分で触ってみて気がついた事、大きくはないけど、確かにそこに胸が膨らんでいて、あわてて股間も確認、そこには、いつも見慣れた物はなかった

これで、俺は確信した

俺は、女の子になってしまったと言う事に

けど、なぜそうなったのかが意味不明だった、覚えてる限りでは家でゲームをしていて、急に眠気が襲ってきて、気が付いたら、こうなっていたからである

ネットとかで、転生とか性転換とかを使用している小説とか見て面白いな? まあありえなくけどな? とか、思っではいたが、まさか自分になるとは思わなかった

着ている服装も、いつも俺が着ている服装ではなく、ピンクのパジャマだったし、よく見てみると、ブラまでしているので、確実に女だな……と、意識してしまったのである

で、女になったのは、まあおいといて、俺は一体誰になったんだ? と思い、鏡面台があるので、さっそく使っていたベットから降りて、鏡面台で、自分の姿を見て見る事にした

そこに映っていたのはと言うと

「え・・・水無月あかね・・・？」

そこに映っていたのは、栗色の髪のショートカットのかわいい感じの顔で、その顔には覚えがあった

何故なら・・・その水無月あかねと言うのは

俺のプレイした事があるゲーム「ラブチュチュ」に出てくるヒロインだったからである

という事は・・・俺、ゲームのキャラになったのか！？っと、心底驚いてしまった

やった事のあるゲームだから、状況を確認する事にした

まず、部屋に飾ってあるカレンダーと、時計で日にちを確認してみる
「っげ・・・七月一日だと・・・？」

カレンダーは、七月となっていて、日にちが一日だった

ゲームでの話で言うところ、この「ラブチュチュ」は、6月の初めからスタートして、七月八日で終わりを迎えるのである

8日を過ぎると、トゥルーエンドか、バットエンドに進み、それでゲームが終わる

最後にはその後どうなったのか、ワンシーンが流れるので、ゲームではよくある設定でもある

水無月あかねを攻略対象にして、やった事のある俺から言わせると、水無月あかねは、六月の最後の日で、ストーリーが劇的に変化するのである

つまり六月の時点で、選択肢を間違えると、バットエンド確定だったから

日にちが七月という事は、百パーセント、トゥルーエンド確定状態なのであった

選択肢も、どれを選んでも、トゥルーエンドだったので、それはよく覚えていた

という事は・・・

「俺・・・トゥルーエンド確定ルートだから、主人公と恋愛する羽

目になるのか!？」

俺は、想像してみる、主人公との恋愛をする事は
はっきり言うと、嫌だった、男だったので、今さら男を好きになれ
ないし

こんな姿になっても、女の子大好き!なのである

だから、俺は、こう決めた

「決めた、絶対にバットエンドになってやる・・・」

そう決めて、行動にうつす事にしたのであった

♪プロローグ♪（後書き）

いきおいとノリで、書いてみました。

うん、これも書こうと思ったら、書こうと思います♪

く第二話く一日く朝く（前書き）

はい、零堵です

今日は、二回目の投稿ですく

〈第一話〉一日目〈朝〉

俺は、とりあえず水無月あかねとなってしまうたので、これからの行動を考えてみる

確か、ゲーム「ラブチュチュ」では、色んなイベントがこれからある筈なので、それを出来るだけ、回避する方向で、動こうと思う。まず、時計で時刻を確認してみる。時刻は、朝の七時となっていた確か、水無月あかねは、高校に通っている一年生だったので、カレンダーを見てみると、今日は月曜日

と言う事は・・・平日なので、学校に行かなくちゃいけないかと思うなので、俺は、着ているピンクのパジャマを脱いだ
パジャマを脱いで、現れたのは、白色のブラジャーだった
うん、改めて思うと、女の子になったんだな・・・とつくづく実感してしまった

触りごちはどうなのかなと、思い、胸を触ってみる

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

感触は、結構柔らかく、なんかフニフニしていた
おまけにちよっと、体が熱くなった気がして、即触るのをやめた
もしかして・・・俺、ちよっと感じてしまったんだろーか・・・と、思ってしまったのである

気を取り直して、下も脱ぐ

下も上とお揃いなのか、白色のパンティーを履いていた

「・・・・男のままだったら、興奮するんだろーけど・・・・今じゃなあ・・・・・・・・」

元の姿だったら、興奮するのも知れないが、自分の体になってしまったので、ちよっと、残念な気分になった

気を取り直して、俺は、ハンガーにかかっている、高校の制服と、折りたたんだあるスカートを持って、着る事にした

うん、制服とスカートは、ゲームと一緒になんだな・・・、と思った

のである

ちなみに色は、クリーム色で、リボンが青色で、スカートの色が緑色の、ちょっと変わった感じの制服だった

女物の制服なんか着た事がなかったので、苦戦しながら、何とか着る事に成功し、鏡面台で、自分の姿を見してみる

鏡に映っていたのは、制服を着た、水無月あかねの姿が、映し出されていた

改めて見てみると、思いつきり美少女だよな・・・と、思う

主人公が、惚れるのもなんかわかる気がするな・・・と、思ったが俺は、主人公と恋愛する気は全くないので、主人公に惚れられないように、頑張る事に決めたのである

そう思っていると、外の部屋から

「あかね？起きてる？朝食出来たわよ」

そう聞こえてきた

確か・・・ゲームだと、俺に話しかけてくる人物は、水無月あかねの母親、水無月文香だと、思われる

俺は、返事しないのもなんなので

「うん、起きてるよ、今からいくね」

そう、答えて、自分の部屋を出るのであった

部屋から出て、すぐにリビングが見つかり、その部屋に行くと

そこにいたのは、朝食を用意して、エプロンを付けた、ゲームと同じ姿の、水無月文香さんがいた

「あ、あかね？起きたのね？いつもは、遅刻ギリギリだったじゃない？」

「そ、そうだったけ？」

「そうよ？いつも私がおこしに行ってあげてたんだから、一体どういう心境なのかな？」

「私だって、たまには早起きするよ」

「そう？それは、助かるわね？あ、朝食出来てるから、食べて学校行きなさいね？」

「あ、はい」

そう言っ、俺は、用意された朝食を食べる事にした。

うん、かなりおいしい、文香さんは、料理上手なのか・・・と、感心してしまったのである。

あつという間に食べ終わって

「あ、そろそろ出かけなさい？あかね？」

「あ、うん、行ってきます」

そう言っ、家を出て、通っている高校とやらに行く事にするのであつた

高校の場所は、名前を覚えているので、問題はなかった

さて、高校に行っ、何から始めようか・・・と、考えながら、通学路を歩く事にしたのであつた・・・

く第二話く一日く朝く（後書き）

アクセス数見てみたら、一日に200人以上ですと！？
ありがとうございます

感想くれると、作者のやる気があがりますく

〜第二話〜一日目〜学校潜入〜（前書き）

はい、零堵です。

投稿します〜

第二話　一日目　学校潜入

まず、外に出て気がついた事は、街中もゲームに登場する街並みだった

まあ、人がちゃんと動いているので、これが現実なんだと、実感してきた

俺は、通学路を歩いて、通っている高校と思われる、建物に辿りつくゲーム「ラブチュチュ」では、私立白稜高校となっていたが、校門を見てみると、「私立白稜高校」と、表記されていた

うん、ゲームで見た学校と、同じ形をしていて、後者の高さも同じだった

もうここまで来たら、驚く事はしないでおくか・・・と思い、校舎の中に入る

水無月あかねは、確か1年4組のクラスだったので、1年4組の教室を、探してみる

すると、二階の奥に、1年4組を見つけたので、その中に入るとクラスメイトがもう、ほとんど座っていた

俺の席は、どこかな・・・と探して、机にかかっている持ち物の名前に「水無月あかね」と、書かれてあるのを見つけて、その席に座るうん、スカートなんか初めて着たからか、なんかスースーした席に座って、これからどうしようかと、考えていると

「おっはようあかね？」

「・・・？」

ゲームの中では、見た事のないキャラが、話しかけてきた姿は、黒髪のショートで、かなり胸が大きい、Dぐらいは確実にあると、思われる

一体・・・誰なんだろうな・・・と、思っている

「どうしたの？あかね？私の事見て、何か考えてるけどさ？」

「えっと・・・誰？」

「ちょっと、それ本気で言ってるの？」

「う、うん、ちょっと階段から落ちちゃって、人の名前とか、忘れちゃったんだ」

適当な嘘をついてみると

「そうなの？大丈夫？まさか、大親友の私の事を忘れるなんてね？私の名前は、笹村理恵子、理恵子でいいわよ？」

「わ、分かった、ありがと、理恵子」

あかねにこんな親友がいたのか・・・驚いたな・・・

「ところでさ？あかね？」

「な、なに？」

「先輩とは、上手く言ってるの？好きなんでしょ？先輩の事」

先輩って事は・・・もしかして・・・

主人公の事か！？

確か、ゲームでの設定の主人公の名前は「初崎孝之」だった筈

「そ、それって、孝之先輩の事かな？」

「そうよ、で、孝之先輩に誘われたのかな？その所、詳しく教えてくれない？」

「さ、誘われてないよ？（まあ、この後誘われるかもしれんけど）」

「ふうん・・・なんかあやしいわね？」

そう理恵子が言うのと、キンコンと、チャイムが鳴り始めた

「ucci、詳しく聞こうと思ったのに、まあいいわ、あかね？また後でね」

そう言って、理恵子は自分の席に戻って行った

これは、とりあえず助かったのか・・・？と、思ってしまったのであった

うん、とりあえず今日のやる事は「主人公の初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と、決める事にして、授業を受ける事にしたのであった・・・

〈第二話〉一日〈学校潜入〉（後書き）

一日のアクセス数が、350人ですと!？
すごいですね・・・こんなの初めてですよ
これからも、この物語をよろしくお願いします。

〜第三話〜一日目〜高村董〜（前書き）

はい、零堵です。

アクセス数すごいですね W

第三話 一日目 高村董

まず、やる事は「初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と決めたので、実行に移す事にした

授業は、なんか簡単だった、まあ先生に当てられもしなかったので、適当に聞いているふりをして、黒板に書かれている文字をノートに写す作業だけをしていて、授業が終わる。

お昼になり、確か、この学校には学食があったので、そこに行ってみる事にした。

そう言えば・・・この世界でのお金ってどうなってるんだろうな？それを確認してみる事にして、自分の鞆の中を調べてみる

中には、ノートや教科書の他に、使用がわからない布状の物も入っていた。

もしかしてこれが、ナフキンとか言う奴なのだろうか・・・？。

そして、ピンクの財布らしき物を見つけて、中身を見てみる。

中には、笹村理恵子とのツーショット写真や、小銭とお札が入っていた。

よく見てみると、小銭もお札も、見た事のある物だったので、これは使えるんだな・・・と、実感した。

そのピンク色の財布を持って、学食へと向かう。

学食に行くと、生徒が大勢いて、結構混雑していた。

その学食の券売機を見ると、お金を入れるスペースがなく、ボタン表示が光っているの

生徒もお金を入れる事なく、ボタンを押しているの、これは、全品無料なのか！？と、驚いてしまった。

まあ、何にしろかなと、考えて、きつねうどんのボタンを押すきつねうどんと書かれた券が機械から出てきて、食堂のカウンターに置くと、すぐにお盆に乗せたきつねうどんが出てきた。

お盆をもって、あいている席に座って、きつねうどんを食べる

うん、マジで美味しい、とりあえず飯に関しては、この世界と前の世界とは、結構同じらしい。

食べながら、まわりを確認してみると、ゲームでの攻略候補の一人を見つけた。

髪の色が銀髪のストレートで、かなりの美人さんに見える

名前は「高村堇」と言っ、確か三年生の上級生である。

ゲームでは、いつも屋上にいて、空ばかりを見ている、結構不思議ちゃんな感じの人だと、高村堇を攻略対象にした時に、思った。

高村堇は、食べ終わったのか、食堂から出て行く。

向かう先は、多分屋上なんだろうな・・・と思い、俺も食べ終わって、屋上に向かう事にした。

屋上に行くと、暑い日差しの中に、外を見ている高村堇の姿を見つけた。

俺は、高村堇に話しかけてみる。

「あの、高村先輩ですよね・・・？」

「・・・貴方は？」

「私、一年の水無月あかねと言います、高村先輩に聞きたい事があるって」

「私に聞きたい事？ 一体何？」

「あの、孝之先輩の事、どう思ってます？」

「孝之・・・ね・・・そうね・・・、まあ、私がここにいる時、

「何してるの？」とか、話しかけてきたのが彼だったわね・・・まあ、彼と一緒にいるのは楽しいわ、これが恋愛感情なのかどうかはわからないけど・・・それにしても、あかねちゃんだけ・・・？ 孝之の事を聞いてくるなんて、好意を持っているって事なのかしら？」

「いえ、違います、孝之先輩が私にしつこく迫ってくるので、私は嫌なんです、だから先輩と仲良さそうな人がいるって聞いたので、話しかけてみたんです」

「そうだったの・・・孝之、そんな事言っ、なかったわね」

「なので、高村先輩、孝之先輩の事が好きなら、ガンガンアタックして下さいね？それじゃあ」

そう言っ、俺は、屋上から出て行く事にした。

これでよしと、次は他のキャラのところにも行く事にしたのであった。

〈第三話〉一日目〈高村董〉（後書き）

俺かの書いていたら、全部いきなり消えたので、こっちの物語を書く事にしました。

この物語もよろしくです

〜第四話〜一日目〜風見理子〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話を投稿します。

〈第四話〉一日目〈風見理子〉

屋上から、次に向かう事にしたのは、図書室に決めたゲーム「ラブチュチュ」の世界で言うところ、図書室の中に、攻略対象の一人がいるからである。

図書室の場所は、以外に簡単に見つかった。

まあ、名前に図書室って書かれてる部屋があるから、そこが図書室なのが当たり前か・・・

その図書室の中に入って、目的の人物を探す。

図書室の中は、古ぼけた感じの棚がいくつも飾ってあって、みんな静かに読書しているので、しゅんと静まり返っている。

その図書室の中を移動して、数分

目的の人物を見つけた。

目的の人物の名前は、二年生の「風見理子」と言っ、なんと緑色の髪をしているのである。

普通に考えてありえねえ色だろ？とか思うのだが、まあここはゲームの世界？なので、気にしないでおく事にした。

緑色の髪のロングヘアーで、眼鏡をかけている。

まあ、眼鏡を取ると、かなりの美少女なのだが、眼鏡を取る行動は、主人公とのトゥルーエンド一日前なので、この状況から察するに、まだ主人公とラブラブではないと思われる。

俺は、その風見理子に話かけて見る事にした。

「あ、あの・・・」

「は、はい・・・何でしょう？」

「私、一年の水無月あかねって言います、ちょっと時間いいですか？」

「私にですか・・・？一体なんでしょう？」

「えーっと・・・初崎孝之先輩の事って知ってます？」

「孝之君の事？・・・知ってるけど・・・そ、それが何か・・・？」

「正直に答えて下さい、孝之先輩の事って、気になったりしません？」

「ま、まあ・・・私が図書室に本を返しに行った時に廊下でぶつかった人で、その人謝りながら、私が持っていた本をもってくれて、あ、優しい人なんだな・・・と、思ったけど・・・」

「じゃあ、好きなんですか？」

「えーっと・・・そこまでは・・・でも、時々みかける程度かな・・・でも、なんでそんな事を聞くの？」

「私・・・孝之先輩の事あまり好きじゃないのに、よく話しかけられるんです、だから・・・先輩に彼女が出来たらいいなって思っ・・・それに風見先輩とお似合いだと思うんです」

「・・・え？お、お似合いじゃないよ・・・、私、引込み体質だし・・・すぐ、緊張しちゃうし・・・」

「大丈夫ですよ、そんな先輩可愛いですから、だから好きだったら、話しかける事が大事ですよ？気になっているのでしたら」

「う、うん・・・そうよね・・・」

「じゃあ、頑張ってくださいね？私、応援してます」

そう言って、図書室から出ていく。

うん、こんな感じでいいかな？あとは、彼女が主人公に話しかけるのを願うのみか・・・。

そう思っていると、キンコンと鳴ったので、仕方がないので、自分のクラスに戻る事にした。

まだ攻略対象者はいるので、話しかけるのは、授業が終わって、放課後からにしよう・・・と決めて、教室に戻る。

教室に戻ると、笹村理恵子が「どこ言ってたの？聞こうと思ってた事あったのにさ？」と言ってきたので、俺はと言うと

「ごめん、ちょっと行く所出来ちゃってね」

そう言うと、理恵子是不満そうな顔をしたけど、すぐに戻って

「まあいいわ、授業が終わったら、聞く事にするわ」

そう言って、席に戻って行く。

俺も自分の水無月あかねの席に戻る。
そして、午後の授業が始まるのであった。

〈第四話〉一日目〈風見理子〉（後書き）

アクセス数が五百人以上ですと!?

こんな事初めてで、かなり驚きです。

感想くれると、作者のやる気があがります。

あと、こんな作品にお気に入り登録してくれて、ありがとうございます。

〈第五話〉一日目〈沖島ユウ〉（前書き）

はい、零堵です。

続きの話を投稿します。

第五話　一日目　沖島ユウ

午後の授業も無事というか、いとも簡単に終わった授業が終わったので、早速行動にうつそうとすると、笹村理恵子がやって来て、こう言ってきた。

「あかね？聞きたいんだけどさ？」

「な、何？理恵子？」

「孝之先輩の事好きなんでしょ？告白とかしたの？」

「い、いや・・・でも、なんでそんな話に？」

「いや、だってあかねが言ってたじゃない、最近気になる先輩がいるのってさ？で、私なりに調べたわけですよ？で、候補にあがったのが孝之先輩ってわけ？で？告白するんでしょう？」

「・・・いや、わかんないかな・・・」

「ふん・・・まあ、私は応援するわよ？頑張りなさい？あかね」

「あ、ありがと、じゃ、じゃあ私は、行く所があるから・・・」

そう言って、教室から出ていく。

うん、応援されても、困るのだが・・・

とりあえず気を取り直して、主人公のいるクラス、2年2組に向かう事にした。

何故、向かうのかと言うと、そのクラスの中に、攻略対象者がいるのである。

2年2組は、直ぐに見つかって、教室の中に入る。

教室の中は、数人の生徒がいて、帰り仕度をしている者や、話し合っている者もいた。

その中に目標の人物を見つけて、声をかける。

「あの、ちょっと来て下さい」

「え・・・？僕に？」

「はい、貴方にです」

そう言って、手を掴み、二人で教室の外に出て、人気のない場所に

たどり着いた。

人気のない場所にたどり着いて、手を離す。

「一体何なのかな・・・？こんな所に僕を連れ出して・・・えゝつと・・・君は・・・」

「私は、一年の水無月あかねって言います。沖島ユウ先輩に話がありまして」

「僕に話？一体何・・・まあ、この状況から察すれば・・・ある程度予想はつくけど」

「じゃあ、単刀直入に言いますね・・・、先輩・・・女ですよ？」
そう、この沖島ユウは、男子の制服を着ているのである。

姿は、黒髪のショートに、結構背が高く、水無月あかねとの身長差が、十Cmも違うのである。

普通に見た目は、結構カッコいい美男子に見えるが、ゲーム「ラブチュチュ」だと、プロフィールを見た時、男装をしていると書かれてあったので、女と確信しているのであった。

「な、何の事・・・？僕は、男だけど・・・」

「そうですか？じゃあ・・・服脱いでくれます？」

「・・・え！？ちょ、ちよつとそれは出来ないかな・・・ここで脱ぐ事じゃないし・・・」

「脱げないんですか？じゃあ、やっぱり女ですよ？」

「だから、そうじゃなくて、そ、そう、僕、体に傷があって、それを見せたくないんだ、だから・・・」

「じゃあ、えい」

そう言って、俺は、沖島ユウの胸を鷲掴みにする。

うん、小さいけど、柔らかい、この自分の体と同じサイズぐらいなのかも？と思ってしまった。

「い、いきなり何するの！」

そう言って、俺を突き飛ばす。

「先輩の胸、柔らかかったです、やっぱり女の子ですよ？私、先輩が女の子って知ってたから、こんな人気のない場所に連れ出した

んですよ？」

「……よく、僕が女の子と分ったね……、秘密にしといたのに……」

「大丈夫です、先輩？私、誰にも先輩の事、言いふらしたりしませんから」

「ほ、ホント？」

「はい、で、先輩に聞きたい事があるんです、先輩の同じクラスの、初崎孝之先輩の事って、どう思ってます？」

「孝之の事？うーん……ま、まあ一緒に遊んだりして、ちょっとかっこいいな……とか、思った事はあるけど……なんでそんな事を聞くの？」

「私、孝之先輩に言い寄られてるので、それを回避したいんです、孝之先輩の事が好きだったら、行動してくれると嬉しいんですが……」

「行動ね……、ま、まあ、僕から言わせると、孝之って僕の事、男と思ってると思うんだけど……、自分からカミングアウトとか、してないし……」

「自分からは、しないんですか？」

「しないよ、ま、まあ、バレたら正直に話すけど……」

「そうですか、私は、応援してますから、頑張ってください、沖島先輩、じゃあ、話す事はこれだけなので、私は行きますね」

そう言って、俺は、沖島先輩から、離れて行った。

うん、こんな感じでいいかな……まあ、あとは行動する事を、期待するしかないか……

さてと、他の三人に声をかけたので、あともう一人いるので、俺は、その人物に会う事に決めて、校舎内を探す事にしたのであった。

〈第五話〉一日〈沖島ユウ〉（後書き）

この四日間で、ユニークアクセス数が6000超えました。
読んで下さり、お気に入りにも登録してくれて、ありがとうございます。
ます。

く第六話く一日く西村舞く（前書き）

零堵です。

続きの話、投稿します。

〈第六話〉一日目〈西村舞〉

あと一人で、攻略対象キャラ全てなので、俺は、校舎内を探す事にした。

まず、屋上に行って見る。

屋上は、夏の日差しで、結構暑く、長くいると汗が出てくる感じだった。

その中にいるのは、三年の高村堇だけだったので、ここにはいないな・・・と、思い、違う場所を探してみる。

次に向かったのは、図書室に向かった。

図書室は、昼休みと違って、人が沢山いたので、目標の人物を探してみる。

見つけたのは、本を読んでいる、二年生の風見理子を見つけた。

理子を見つけたので、俺は、聞いてみる事にした。

「風見先輩、こんにちは」

「あ、あかねちゃんでしたっけ？ま、また何か？」

「あのですね・・・西村先輩の居場所って、分かります？」

「西村さん？・・・西村さんなら、今頃、校庭じゃないかしら・・・、さっき見かけたし・・・」

「ありがとうございます」

そう言って、理子先輩と別れる。

校庭か・・・、とりあえずまだいると信じて、校庭に出てみる。

校庭には、部活動をやっているのか、結構沢山の生徒が、体操着を着て、動いていた。

その中にひととき目立つ存在を探してみると、見つけた。

体操着を来て、運動場を走っている、西村舞を見つけたのである。

何で、目立つ存在なのかというと、この西村舞は、髪の色が水色なのである。

水色の髪にポニーテールに巨乳なので、かなり目立っている。

ゲーム「ラブチュチュ」だと、陸上部と言う設定なので、今の時間だと、走りこんでるんだな・・・と、思った。

ちなみにこの西村舞は、主人公の幼馴染という設定で、家も隣同士、性格もよし、料理も上手なので、男だった俺から言わせると、主人公に対して、リア充死ね！って思った事も何度かあった。

今、練習中見たいなので、練習が終わったら、話しかける事に決めて、練習が終わるのを待ってみる。

ずいっと練習風景を見ていて、そしてどうやら練習が終わったので、西村舞に話しかけた。

「西村先輩、こんにちは」

「あら？あかねちゃんじゃない、一体私に何の用？」

「西村先輩に聞きたい事あったんです、孝之先輩の事で」

「孝之の事？また、あの馬鹿が何かやらかしたの？」

「はい、まあ・・・それで、西村先輩は、孝之先輩の幼馴染ですよ？」

「まあ、世間一般的にはそうね、家も隣同士だし」

「じゃあ、孝之先輩の事って、どう思っています？付き合いたいと思いますってませんか？」

「あの馬鹿、せっかく私が、遊びに行こうとか誘っているのに、断るのよ？二人きりで行こうと思ってたのに・・・それに、孝之のためにお弁当とかも作ってあげてるのに、感謝の気持ちもないのよね・・・まあ・・・私が好きでやってるんだけど・・・」

「やっぱり好きなんですよね？」

「そう言われれば・・・そうよ・・・もしかして、あかねちゃんも孝之の事が？と言う事は、ライバルになるわけ？」

「いえいえいえ、私なんか孝之先輩の事が、好きな筈ないじゃないですか、先輩？実はですね？孝之先輩の事を好きな人、他にも三人ぐらいいるんです、すごいモテますから、孝之先輩、きっと他の女性から、声をかけられてるとか、ありますよ？」

「そうなの？ほく・・・それは、知らなかったわね？孝之に問い

ださないと！」

「だから、孝之先輩の事が好きなら、GETして下さいね？ 私としても、その方がいいですし、じゃあ、よろしくお願いします」

そう言っ、お辞儀をしてから、西村舞から離れて行った。

よし、これで、攻略対象全員に声をかけたから、あとはどうなるかって感じだな？

学校に残っていると、主人公に声をかけられそうなので、水無月あかねの家に、戻る事にしたのであった。

〈第六話〉一日目〈西村舞〉（後書き）

うん、毎日のアクセスが二百人以上って凄いですね。
こんな事初めてで、ちょっと驚きです。

これで、攻略対象キャラ全て、揃いました。

うん、ここからどう書くかな・・・って、悩みます。

ちなみに自分は、ゲームはあまりやらなくて、やると言っても最近
は、落ちげーの「ぷよぷよ」ぐらいですかね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720y/>

気が付いたら、攻略されそうです・・・

2011年11月30日11時51分発行